

将棋は人事、囲碁は経営 ～ビジネスに生きる将棋・囲碁～

宮下佳廣

中学生棋士藤井聡太 4 段の登場で、昨年から将棋ブームが続いています。永世竜王位をとった羽生永世 7 冠と囲碁の井山 7 冠（二度の 7 冠）が、同時に国民栄誉賞受賞という嬉しいニュースを聞き、囲碁を覚えた若いころを思い出しました。

20 代半ばの営業担当時代、当時の支店長との雑談で麻雀の話を出した途端、「馬鹿もん、麻雀は一か八かの運のゲームであり、年をとって思考力が鈍くなってから嗜むものである。君のような若者は、理詰めでものを考える力を身につける、それには囲碁が最適。本日只今から、麻雀を辞め囲碁を覚えろ!」と叱責を受けたのです。支店長は、得意先との接待でよく麻雀をされており、囲碁はプロ棋士から指導を受けており双方を熟知した上での発言と理解し、麻雀を辞め囲碁を始めました。習いたての頃、指導を受けたプロの先生に囲碁上達の心構えを聞いたところ、「自分に都合の良い手を相手が差してくれる事を期待するのではなく、自分が最も困る手を相手が差して来た時にどうするかを常に考えておくこと。」と教えられ、リスクへの備えを怠らないビジネスの真髄につながる考えとして、その後の企業人生の座右の銘となりました。

「将棋は人事、囲碁は経営」と言われます。将棋は一つ一つの駒の働きが違い、その駒の活かし方で勝負が決まります。敵陣に駒が入れば「成り」と機能が強化され、最後は敵の王将を「詰ます（動けない）」ことで投了です。高飛車（王将に次ぐ強い駒の飛車が前面に出て威圧する）、成金（一番弱い駒の歩が敵陣に入り金と同じ強い駒と成る）の言葉が将棋から生まれています。一方囲碁は、黒石、白石の個々の働きは同じで、それぞれがつながり囲いあった陣地の大きさ（目の数）で勝負が決まるのです。そこから大局観、布石、定石、死活（石の生死）、駄目（白地にも黒地にもならない無駄な手）、先手を打つ、一目置く、岡目八目等の言葉が日常用語となっています。このように、人材活用では将棋、事業戦略では囲碁の考え方が応用されます。

支店長の一喝で始めた囲碁は、その後同好の人たちとの交流から人脈が広がりました。更に、前述のリスクへの備えのように身の回りの出来事の対処に囲碁由来の言葉を参考にする場面がしばしば出てきました。前人未踏の高みに達した羽生さんや井山さんですら、未だ将棋や囲碁の本質がわかっていないとコメントしているように、習い事は己の未熟さを実感し、向上心につながるまたとない機会ともなります。前々号の「社会的時間を増やす」ことにも関連して、皆さんもこれからの多くの人との出会いやきっかけを捉え、習い事に挑戦してみてください。江戸いろはかるたの「け」に「芸は身を助く（Art brings bread）」とあるように、趣味や習い事は皆さんの人生を必ずや豊かにしてくれることでしょう。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

ものを産みだす人の縁

宮下佳廣

一昨年の3月29日、私、小野・田井さんの3人は、北海道の東室蘭駅で待ち合わせました。製鉄所の現場における問題解決へ向けて、当地にある室蘭工業大学と技術的な打ち合わせをするためです。「産学連携」は千代田にとっての長年の課題でした。現場の問題点をここまでの形にしてきた二人の努力に敬意を表するとともに、このような機会につながった「地の縁・人の縁」に想いをめぐらせました。

ちょうど52年前の同じ日にも、私は東室蘭駅のホームに立っていました。昭和41年4月1日の出光の入社式に臨むためです。汽車と連絡船を乗り継ぎ一昼夜かけて上野に着き、翌31日は式典会場の明治神宮の場所を確認するという行程でした。当時、私の家は急行が止まらない小さな町にあり、最寄りの急行停車駅の東室蘭まで父が送ってくれたのです。お互い会話はほとんど無く私は夜行列車にりましたが、「しっかりやってこい」という期待が背中に伝わりました。あの日から半世紀以上を経て、駅舎は木造から鉄筋コンクリートに代わっていましたが、長いホームはそのままでした。

今回の産学連携の橋渡し役である室蘭工業大学のN特任教授は、千葉大学園芸学研究所同窓生で、大手ゼネコン出身で私の2年後に農学博士の学位をとり、鎮守の森コミュニティの活動にも参加してもらった縁があります。その後母校の室蘭工業大学に招聘され、担当職務が産学連携ということから、今回の千代田の話に発展しました。このことも不思議な縁と感じています。このような経緯から2年が経過しプロジェクトは順調に進展しています。今後も幾つかのハードルはありますが千代田発の独自商品が誕生することは間違いありません。ユーザーのトップからも、「クリーンな職場づくりにつながるタイムリーな提案」と高い評価を受けていると聞いています。営業所からの発案を本社の経営企画部門がフォローし、ユーザー、大学そしてメーカーへと粘り強い折衝を積み重ねた結果であり、今後への大きな自信となることでしょう。

古語に「産霊（むすひ）」という言葉があります。「霊を産む」とは、万物を産み出すクリエイティブな力、生成力を意味し、結合を表す概念として「結び」となっていると言われています。今回の発端となった発信者の感度と意欲は何よりも素晴らしく、そのモチベーションが周りの人達を動かしてゆきました。サポートする多くの人達の縁が結ばれ、プロジェクトは進んでいます。まさに人の縁が、新たな商品を産みだす証左といえましょう。

3.29は、千代田が新たな事業展開へつながる「地の縁・人の縁」の端緒となった日です。さらにこの縁が広がり、第二、第三のテーマが誕生することを期待しています。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

心を離すな ～先輩社員の心得～

宮下佳廣

鎮守の森の活動で埼玉県にある秩父神社を度々訪れています。神社の境内には宮司による「親の心得・四訓」を記した掲示板があり、絵馬や屏風の置物にもなっています。新入社員を迎える4月、この親の心得を昨今の家庭や学校における社会問題に関連して、職場での人間関係に対する人生訓として捉えてみました。

秩父神社は、ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」33ヶ所の一つとして登録された「秩父夜祭」でよく知られている神社です。京都大学宗教学の名誉教授でもある藺田宮司は、神社と地域コミュニティのあり方について各地で講演をされ、私たちの鎮守の森コミュニティの活動にも理解をいただいています。この親の心得四訓は、

赤子、幼児、子供、若者とそれぞれの成長期に応じた対処の仕方を次のように述べています。

赤子は出生によって外界にさらされ不安になることから、心の安定を保つためにも、肌と肌を合わせることが大切である。幼児には、乳離れをするが常に親がそばにすることで安心感を与えることが必要である。子供には、社会性を身につける時期なので活動範囲を広げていく支援をするが、危険が多い社会情勢から眼を離してはいけない。若者には、完全な自立を目指して自分なりの生きがいや進路を迷いながら進んでいく時期であるから、気持ちの上では心を離してはいけないということです。



千代田は経営理念に社員の成長を掲げており、業務課題の達成と共に後輩若手社員の育成が大切な仕事です。人材育成には三つの方法があります。第一は現場における教育、指導というOJT(On the Job Training)であり、次いで業務外の教育いわゆるOff-JT(Off the Job Training)、そして三番目は自分自身で努力していく自己啓発SD(Self Development)です。OJTが直接的なタテの関係とすれば、Off-JTは間接的なナナメの関係と言えましょう。一昨年「海賊からの便り」で「ナナメの関係の大切さ」を述べました。人間愛、親子愛の欠落という社会問題の対策の一つに親子兄弟、教師と生徒というタテ・ヨコの関係だけでなく地域コミュニティによるナナメの関係にもこの心得が当てはまります。千代田の職場においても、所属部署内のタテ・ヨコの間関係は当然のこととして、他の部署からのナナメの関係も充実させ、会社全体で先輩後輩の絆を強めていくことが求められています。秩父神社の親の心得にならう先輩社員の心得として、後輩それぞれの成長過程に応じて、肌(会話)、手(手本)、眼(指導と助言)、心(期待と希望)を離さずに育てて参りましょう。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

伝える力 ～ホモ・サピエンスの子孫～

宮下佳廣

特殊メイクで日本人がアカデミー賞を受賞した話題の映画「ウインストン・チャーチル」を鑑賞しました。第二次世界大戦の最中、英国がナチスドイツに追い詰められ、和平か徹底抗戦かと揺れ動く議会で、政敵をして「彼は言葉を武器に戦場に乗り込んだ」と言わしめたチャーチルの演説が印象に残っています。

現生人類のルーツはホモ・サピエンスであり、ラテン語の *homo* は「人間」、*sapience* は「知恵」と訳されます。現生人類と同時代に生きていたといわれるネアンデルタール人は2万数千年前に絶滅していますが、その脳容量は大きく、知能や情緒の面でも現生人類と変わらなかったようです。ただ、ネアンデルタール人は喉の奥（上気道）が短いため、発声能力が低く、現生人類より「コミュニケーション能力」が劣っていたと考えられています。このためマンモス等の大型哺乳類の狩の際、群れのリーダーによる「包囲しろ」「待ち伏せしよう」というような集団を統率する力が働かないため、成功率が現生人類より低かったことが想像され、生存競争に敗れたのではと最新の研究でいわれています。このように、言葉を伝える力を原動力として私たちの祖先は、6万年前に東アフリカを出て世界中に広がっていきました。

ビジネスマンの必読書といわれる池上彰の『伝える力』（2007年：PHP）では、コミュニケーション能力とは伝える力であり、その基本は「もう一人の自分を意識する（相手の立場に立ってみる）」、「便利な言葉に逃げない」としています。同様にカーネギーの『話す力』（2015年：新潮社）には、話す前に「伝えたいことは何かを考え直す」、「反対意見を話す場面では共通点を述べる」等の話す技術が記されています。この両書に共通している点は、話す技術よりも、自分の考えや感情を他人に理解してもらいたい、共感してもらいたいと強く思う気持ちが最も重要であるとしていることです。

近年インターネットという便利な伝達手段が普及しています。そのため情報が氾濫し、かえって大切なことが伝え難くなっています。私たちの先祖は食糧を確保するため、リーダーが家族や仲間たちに合図の言葉を発したのです。チャーチルは国難の時、議会と国民に情理を尽くして語りかけ戦争を勝利に導きました。本来、コミュニケーション能力、すなわち伝える力とは、共に行動を起こす呼びかけにありました。

千代田の皆さんも、職場や家族友人との会話の中で、本当に伝えたいことは何か、その伝え方で相手の共感を呼べるか、というコミュニケーションの原点を再認識してみましよう。私たちは知恵のある人ホモ・サピエンスの子孫なのですから。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

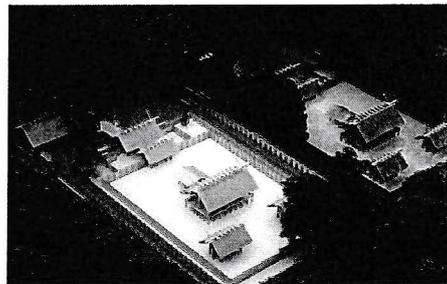
常若の精神

～千代田版 SDGs～

宮下佳廣

鎮守の森の活動で伊勢神宮を度々訪れています。人口3千万の江戸時代には、年間6百万人、5人に一人がお伊勢参りをしていたようです。近年、式年遷宮、伊勢志摩サミットと大きな行事が続いたこともあり、外国人を含めた年間の参拝者が1千万人を超えるという人気スポットになっています。

伊勢神宮は20年に一度の式年遷宮によって、古い形体を保ちながら常に若々しい姿で迎えてくれます。神道のことばにある「常若」とは、衰えることなく瑞々しいエネルギーがあふれている状態のこと。持続、継承していく目的が明確にこめられています。西洋的発想ではコンクリートなどで頑健なものを作ることがサステナビリティと考えられていますが、日本的サステナビリティの象徴といえる式年遷宮は、朽ちやすく簡単に壊すことができる木を用い、定期的に作り替えることで永遠の若さを保っています。



左が新殿舎、右が旧殿舎（伊勢神宮）

伊勢神宮ゆかりの「豊宮崎文庫」に学び、第一回の衆院選に31歳で当選し、94歳まで衆議院議員を務めた尾崎行雄は、「議会政治の父、憲政の神様」とよばれています。地元の人たちは、日本中に政治の理想を説く尾崎を伊勢の誇りとして手弁当で応援していました。江戸から明治、大正、昭和と激動の時代を生きた尾崎は、盟友の犬養毅を5.15事件で失い、自らも病床に伏し打ちひしがれていた70代半ばの時、天啓のように「人生の本舞台は常に将来に在り！」の言葉が浮かんだといわれています。この箴言を唱えた尾崎には伊勢神宮の常若の精神が貫かれていたのでしょうか。鎮守の森コミュニティ活動の仲間も、将来を見据えていた尾崎行雄の生き方を見習いたいと話しております。

今、世界は混沌とした各国の政治情勢、AIに代表される科学技術の進展、個人の価値観の変化と、あらゆる分野で大きな変革期を迎えています。しかし紀元前3千年頃、メソポタミアに最初の文明をスタートさせてから5千年の歴史を積み重ねてきた人類は、これからも降りかかる試練を乗り切っていくものと信じています。そのための取り組みが2015年に国連が採択した世界193ヶ国が参加するSDGs:Sustainable Development Goals（持続可能な開発のための2030アジェンダ）です。具体的には地球規模の課題解決と豊かで活力ある社会づくりに向けて17の目標（貧困・飢餓・保健福祉・教育等）を掲げています。これを受けて日本でも現在国会で取り上げられて

いる「働き方改革」にみられるあらゆる人々の活躍、健康長寿、地方創生、循環型社会等の施策が織り込まれております。

二年後に創業 70 周年を迎える千代田の事業経営を振り返れば、創業の精神にある利益性、社会性、人間性の三本の柱を実践し、社会的存在意義のある企業として持続していくことに尽きると思います。今後の経済情勢の変動や、働く人達の価値観の変化に耐えうるレジリエンスな企業として、2030 年を目指す千代田版 SDGs を創りあげていただきたいと思います。その原動力として期待するのは次世代を担う若い力です。中期計画にあげられた逆三角形の組織風土を醸成し、80 周年、100 周年と常若な千代田が継承していくことを切に願ってやみません。

60 号という区切りの最終号です。今までも多くの皆さんから感想・ご意見などをいただき、私自身大変勉強になりました。この欄をかりてあらためて御礼申し上げます。

ym2041@axel.ocn.ne.jp